

# さまざまな絵の具

どんな絵の具も顔料とそれを紙やキャンヴァスに定着させる展色剤でつくられている。加える展色剤によって絵の具の種類が決まる。それぞれの絵の具の展色剤とその特徴を知ろう。



## ●フレスコ

展色剤なし

西洋の壁画に使用される技法としては最も古く一般的な技法。石灰や水、砂などを混ぜ合わせた漆喰<sup>しっくい</sup>を壁面に塗り、乾かないうちに、水で溶いた顔料を塗って描く。漆喰の中の石灰が空気中の二酸化炭素に触れて石灰石に戻る際に、顔料ごと結晶化することで、壁面に定着する。漆喰が固まるまでの7~8時間で描く必要があるため、画面を分割し、1日で描ける範囲だけ漆喰を塗って描き進める。



フレスコはやり直しがきかないため、計画的に進める必要がある。下地をつかった壁面に、その日に描く分だけの漆喰を塗り、原寸大に描いた下絵を転写して作業を進める。大きな作品もこの作業を繰り返して完成させる。

## ●テンペラ

展色剤……卵

西洋では油絵の具が普及する以前、テンペラはフレスコと並んで、主要な技法の一つだった。卵が展色剤の役割を果たす。卵のタンパク質と脂質が顔料を包んで画面に定着させる。耐久性に優れており、ルネサンスの時代に描かれた作品の色を、今でも鮮明に確認できる。乾燥が早く、画面上で混色することが難しいので、薄い色を重ねたり、細かい線を重ねたりして、色の明暗や深みを出す。

テンペラ絵の具をつくる



①卵黄は膜を取り除くため、ラップなどで包み、穴を空けて卵黄のみを絞り出す。



②よくすり潰した顔料に、酢で溶いた卵黄を加える。酢は防腐剤の役割をする。



③顔料と卵黄をよく練り、水を加えて描きやすい濃度に調整する。

## ●油絵の具

展色剤……乾性油など

15世紀になると、乾性油（空気中に放置すると固まる油）を展色剤にした絵の具を用いる技法が確立し、油絵の具が絵画の中心の画材になった。独特の光沢と透明感があり、乾燥に時間がかかるが、しっかりと定着する。



油絵の具は、塗り重ねることで重厚な表現ができる。溶き油の使い方などに注意しながら描き方の手順を確認しよう。

教科書 ⇨ P.92~93  
「油絵の具で描く」

## ●水彩絵の具

展色剤……アラビアゴム

水彩絵の具は、マメ科の植物アラビアゴムノキから採取した樹脂を展色剤とする。18世紀末にイギリスで、固形の透明水彩絵の具が発売されると、携帯できる便利さから広く使われるようになり、紙の地色を生かした独特の表現技法が生まれた。



水彩絵の具は、水の効果や筆の使い方によって多彩な表現ができる。色を重ねる順などに注意しながら描き方の手順を確認しよう。

教科書 ⇨ P.90~91  
「水彩絵の具で描く」

## ●アクリル絵の具

展色剤……アクリルエマルジョン

20世紀になると、アクリル樹脂を乳化したアクリルエマルジョンを展色剤とするアクリル絵の具が発明され、新しい絵の具として普及した。紙だけでなく、ガラスや金属、コンクリートなど、さまざまなものに描くことができる。



アクリル絵の具は、加える水の量や補助的に使用するメディウムなどによって幅広い表現ができる。乾燥すると水に溶けなくなる性質がある。

教科書 ⇨ P.94~95  
「アクリル絵の具で描く」

## ●日本画の絵の具

展色剤……膠

日本画の絵の具は、動物性コラーゲンを濃縮して固めた膠を展色剤とする。描く際には、顔料と溶かした膠を自分で混ぜて使う。鉱石などを原料とする岩絵の具、天然の土や染色した胡粉<sup>こふん</sup>を原料とする水干絵<sup>すいひ</sup>の具がある。



日本画の絵の具は、顔料と展色剤である膠を自分で混ぜて絵の具として使う。描くための準備をしっかり確認しよう。

教科書 ⇨ P.96~97  
「日本画の絵の具で描く」